

# 東日本大震災以後の備忘録ないしは切り抜き帳(その50)

[2017年3月26日(日)]

○今朝の朝日新聞の天声人語『沖縄戦の90日間』を以下に転載させて頂く。「ちょうどいまごろから咲く沖縄の県花デイゴは炎のような色をしている。《でいごの花が咲き、風を呼び、嵐が来た》。90年代のヒット曲「島唄」は、沖縄のひめゆり学徒隊の話を聞いた衝撃からつくられた。「自分の無知に怒りがこみ上げた」とボーカルの宮沢和史さんは振り返っている▼72年前のきょう、沖縄戦は始まった。慶良間諸島に米軍が上陸し、水面を埋める艦艇で海は黒く染まった。ありったけの地獄を集めたと形容された地上戦は90日間続く▼沖縄戦は、運命の分かれ道が延々と続く。始まりや終わりだけを知っても、体験者の本当の苦しさは理解できない。そんな思いから、日米の記録や住民の証言などをもとに、一日ごとに何が起きたのかをたどったことがある▼3月28日の集団自決に居あわせた女性は証言する。「私の頭部に一撃、クワのような大きな刃物を打ち込み、続けざまに、顔といわず頭といわず……目を開いて、私は私を殺す人を見ていたのです」(『沖縄県史』)▼叫ぶ。泣く。燃やす。ためらう。命ずる。死ぬ。記録をめぐるたびに「これが戦争だ」と違う側面を突きつけられる。沖縄戦で亡くなった日米の軍人や地元の住民は約20万人。それぞれの形の「戦争」があった▼沖縄は、本土を守る「捨て石」として戦場となった。その体験を共有することは簡単ではない。それでも想像力を働かせることはできる。6月23日の「慰霊の日」までの90日間。心のタイマーを72年前に合わせてみたい。」

☒ 沖縄戦の初期の段階で、米軍が上陸した慶良間諸島で何が起こったのかについては、以前に「東日本大震災から4年半後の現実：備忘録ないしは切り抜き帳(その22, 2015. 9. 25)の中で触れさせて頂いたことがあったが、先月沖縄本島を訪問した時の印象では、慶良間諸島の場合とはまた違った戦争の終結のされ方であったように思われた。いずれにしても、沖縄が本土防衛のための防波堤(上記の表現では「捨て石」として多大な犠牲を払わされたことは歴史的事実であり、そのことを抜きにして、辺野古への新基地建設などの問題を語ることはできないのではなかろうか。「折々のトピックス、駆け足の沖縄基地・戦争・歴史, 2017. 2. 11.)」を参照されたい。(3/27にコメントを追記)

[2017年3月27日(月)]

○森友学園疑惑(本当は疑獄)についてはもう触れられなかったのであるが、右の山口二郎氏のコラムは非常に良く論点がまとめられているので、引用転載をお許し頂きたい。国会論戦を視聴して大変もどかしいのは、見るからに怪しげな安倍内閣の面々をどうして野党諸氏やマスメディアが追及しきれないのかと云う点である。ことは森友学園理事長の疑惑追及などよりも、政治家・官僚の疑獄事件へと発展する、より深刻な問題なのではないだろうか。

○つい先日、東日本大震災の津波で被災した大川小学校を訪問してきたばかりであるが、昨日の東京新聞によれば、29日に仙台高裁で控訴審の第1回口頭弁論が開かれるとのことである。被災児童の遺族が勝訴したはずの一審で、仙台地裁判決に不服を申し立てたのは、石巻市の広報車による避難呼びかけ(津波が来襲する僅か5分前)よりも早期に津波を予見できたのではないかと、そのことを実証するためには一審で証人申請が却下された“生き残った教諭”の尋問が必要ではないかと云う理由からであるが、これからの控訴審の成り行きに注目してゆきたい。

○東京新聞の片隅に毎日掲載される“平和の俳句”には時折ハッとさせられるが、今朝の右の句もその一つであった。『縄張なんか』が意味深長であるが、昨今の安倍首相の次元の低い国会答弁などのことが思い起こされ、おかしくて、おかしくて……。

[2017年3月29日(水)]

### 本音のコラム

森友学園の籠池理事長の証人喚問は真相解明に結びつくものではなかったが、政治、行政の腐敗を明らかにするものではなかった。国有地の払い下げや小学校の設立認可をめぐって、贈収賄などの犯罪があったとは思えない。しかし、見方を変えれば、だからこそ今の腐敗は質が悪いということもできる。

安倍首相の妻昭恵氏が籠池氏の求めに応じて口利きをした。ことはないかもしれない。しかし、首相や夫人と親密な関係にあることを暗示すれば、幼稚園長の頼みであっても首相夫人付き官僚が財務省の高級官僚に事情を問いわせ、予算

### 無責任の王国

山口 二郎

措置についても情報提供してくれる。それだけでも不正と言え。財務省は国有地の値引きについて適正な手続きに沿ったと言いつ張るが、価格算定の過程に関する資料は廃棄したと、以後の説明を拒否する。政治家からの働きかけはなかったのかも知れないが、森友学園に対する売却が前例のない厚遇であったことは明白である。政治家は明示的な指示を出して、官庁は有権者から政治の意向をおもんばかすことで優遇を与える。そして、意思決定はすべてやぶの中。

法治国家における責任追及は、文書に基づく意思決定を前提としている。以心伝心の資料の廃棄は、法の支配を崩壊させ、誰も責任を取らない専制国家をもたらす。(法政大教授)

2017. 3. 26

### 大川小控訴審

29日から 生き残った教諭 尋問認定注目

津波の予見性再び焦点

3. 26

2017. 3. 27

平和の俳句 戦後72年  
春の地震縄張なんかおかしくて  
野崎 憲子(63) 香川県さぬき市

(いとうせいこう) 地球という存在が起す現象を前にして、人間の利権の愚かなこと。〈幸子兜太〉春です。縄張の根性なんか吹き飛ばして、自由を味わいます。

[2017年3月29日(水)]

○今朝の朝日新聞天声人語は『パン屋でなく和菓子屋』と題して、来春から使用される道徳教科書を揶揄している。「天ぷらといえば、すしと並んで和食の代表選手であり海外でも人気のメニューである。もっともその起源には諸説があり、ポルトガルから伝来したとの説がかなり有力だと原田信男著『和食と日本文化』で学んだ▼どうも17世紀ごろ伝わったようで、語源もスペイン語系のTemporaだとする説を紹介している。日本は早くから、よその国の料理を取り入れ、食文化を豊かにしてきた▼パン食も定着し、近所にお気に入りのパン屋をお持ちの方もおられよう。ところがそんなパン屋が、教科書からはじき出されたのだという。小学校道徳の教科書検定の結果「にちようびのさんぼみち」との教材に登場していた「パン屋」が「和菓子屋」に変更された▼学習指導要領が求める「我が国や郷土の文化と生活に親しみ、愛着をもつ」との点が不足すると文部科学省が指摘し、出版社が修正した。パン屋では日本らしさが欠けるということか。同様の理由で、公園の遊具が和楽器の店に差し替えられた▼もう50年以上前だが、評論家の加藤周一が仏教伝来や洋服などを例に、日本は雑種文化であると論じた。「日本精神や純日本風の文学芸術を説く人はあるが、同じ人が純日本風の電車や選挙を説くことはない」と書き、偏狭な日本主義者を批判した▼和菓子や和楽器にすがって国や郷土への愛を説くとすれば、滑稽というほかない。本質よりも体裁にこだわる大人たちの姿である。まさか反面教師としての教育の一環ではあるまい。」

同日の東京新聞「本音のコラム」にも見られた。本田美奈子氏の『パンと道徳』がそれで、彼女らしいと思うのは、文科省の検定基準に「人権についての規定はなし。個人の権利は教えない。差別問題にもふれない。全体に従順で主張しない子を求めている印象だ」との指摘をきちんとしている点であろう。

二〇一八年度から使用される道徳教科書。「パン屋」が「和菓子屋」に変更された。国や郷土を愛する態度が足りないから、あほか、と思っ

細かいツツコミならいざ知らず、日本のパンの元祖は、幕末の伊豆並山の代官で兵学者でもあった江川太郎左衛門が兵糧として焼いたパンだったこと。明治初期に木村屋が開発したあんぱんは発酵に饅頭の酒種を使ったこと。一方、和菓子は遣唐使が持ち帰った中国の菓子にルーツを持つこと。和菓子の発展を促した茶の湯も、栄西が大陸から持ち帰った茶からはじまること。つま

りどころも郷土というより国際交流の賜で、両者の間に差はない。とはいえ問題はない。文科省は四つの視点に基づく二十二項目を掲げている。この中には感謝、礼儀、伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度、一動ともに規則の尊重、一動愛、公共の精神、家族愛、家庭生活の本質などが含まれる。人権についての規定はなし。個人の権利は教えない。差別問題にもふれない。全体に従順で主張しない子を求めている印象だ。教科書だけでなく、これを基準に子どもたちの道徳観に点数をつけるのだ。パンの代わりが和菓子なら教科書化された道徳は教育勅語のリネオア版？ アンパンマンが怒るよ。(文芸評論家)

2017.3.29

**本音のコラム**

本田美奈子

2017年3月29日

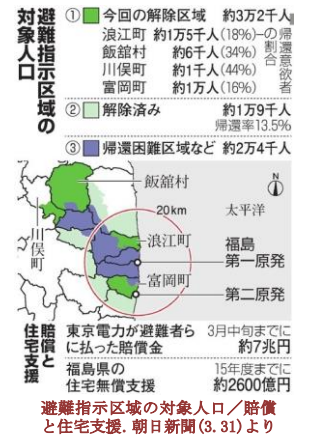
○右の地図は、東京新聞の原発取材班がすでに避難指示が解除されている檜葉町と、もうすぐ解除される富岡町を中心に、車での放射線量の移動測定を行い、その結果を地図に落としたものである。注目すべきは、一般人の年間被ばく線量限度(1ミリシーベルト)を超える恐れのある線量が帰還予定地域でも測定されている点であるが、4月以降、富岡町では帰還後の健康管理をどのように行うつもりなのだろうか。



[2017年3月31日(金)]

○今朝の朝日新聞は『原発避難、3町村で解除 福島』と題して、以下の記事を掲載していた。「31日午前0時、東京電力福島第一原発事故に伴う避難指示が福島県の3町村で解除された。翌1日解除の富岡町と合わせて、対象

は3万2千人にのぼる。6年前の事故直後に出された避難指示は、帰還困難区域を除いてほぼ解除される。31日の解除は浪江町、飯館村、川俣町。浪江町と飯館村、1日解除の富岡町では全住民が避難していた。事故後、政府は11市町村約8万1千人に避難指示を出した。その後、年間積算線量が20ミリシーベルト以下、生活インフラの整備、などを条件に解除を進めてきた。第一原発が立つ大熊町と双葉町は引き続き全住民の避難がつづく。ただ、住民の帰還意欲は低い。今後、賠償や住宅支援などが段階的に打ち切られる一方、政府は帰還促進と自立支援に焦点を移す。2017年度の政府予算では医療体制整備の基金236億円を創設。医療機関の再開を支援するなどして住民帰還の環境を整える。(署名記事) 右の図で注目したいのは、帰還意欲者の割合が全体的に低く(50%にも満たない)、しかも飯館村、川俣町と浪江町、富岡町との間で著しい格差が生じている点ではなかろうか。これは、安全への公的なお墨付きよりも自主的判断の方が重視されている結果ではないかと想像される。



○今朝の東京新聞“筆洗”に興味深いコラムがあったので以下に引用させて頂きたい。「ショートショート(超短編小説)の名手・星新一さんに「デラックスな金庫」という作品がある。ほとんど全財産をつぎこんで、大金庫を作った人物の話だ▼鋼鉄製で外側は銀張り、内側は金張りという豪華きわまりない大金庫のため、家も手放してしまったので、アパートの一室で暮らす。暇さえあれば金庫を磨き上げ、ぴかぴかとなった金庫の表面が自分の姿をうつすのを見て悦に入っているが…と、話は進む▼政府の面々も、この話の主人公に似ているかもしれぬ。彼らが大切にしているのは、世論の大きな反対を押し切って手に入れた「特定秘密保護法」という大きな金庫だ▼その中には、何が入っているか。本来は金庫に収めてはならぬもの、国民に明らかにしなくてはならぬ情報も入っているのではないか。それを点検する衆院の情報監視審査会の報告書によると、443件の特定秘密のうち、何と4割弱の166件は「文書」そのものがない、と分かったという。物々しい特定秘密の金庫を開けたら、中はカラッポだった…というのだから、おかしい話だ▼「デラックスな金庫」の主人公も実は、金庫の中には何も入れていない。豪華な金庫を狙って忍び込む輩を、金庫の中に閉じ込めてしまうのだ▼さて「特定秘密」の大金庫に閉じ込められているのは何か。それは、私たちの「知る権利」ではないのか。」

2017年3月31日

文責：瀬尾和大